

## 労働力調査の結果を見る際のポイント No. 20

## 季節性を考慮した原数値の比較

- 月次統計を分析する際、前月や前々月との比較を行う場合は、原数値から季節的な要因による変動（季節変動）を除いた季節調整値を用いることが適切です。このため、労働力調査では、完全失業率や就業者などの主要系列について、季節調整値を公表しています。

※ 労働力調査で作成・公表している季節調整値は、長期時系列表1 (a-1)～(a-8)を御覧ください。

長期時系列表 <<https://www.stat.go.jp/data/roudou/longtime/03roudou.html>>

- 一方で、原数値をそのまま前月と比較した場合、原数値には季節変動の変化分が含まれることから、足元の動向を適切に捉えられない可能性があります。
- 例えば、2020年4月の就業者数をみると、季節調整値による対前月増減は▲107万人(①)に対して、原数値の対前月増減は▲72万人(②)となっています(表)。これは、就業者の原数値には3月から4月にかけて水準が増加する季節性が存在することから(図)、「原数値の対前月増減」では、足元の減少幅を過小に捉えてしまうことになります。
- 一般的に、原数値同士を比較する際には、季節性を除くために対前年同月増減を用いることが適切です。そこで、季節性を考慮した上で原数値から足元の動向を把握するために、前月からの対前年同月増減の拡大・縮小(対前年同月増減の拡縮)の幅をみることが考えられます。
- 2020年4月の就業者(原数値)の対前年同月増減は、3月の+13万人(③)から▲80万人(④)となっています。これを対前年同月増減の拡縮でみると、▲93万人(⑤)(= -80万人 - 13万人)となり、足元の動向を過小に捉えていた原数値の対前月増減(▲72万人)に比べて、より適切にその動向を捉えていると言えます(表)。
- ただし、対前年同月増減の拡縮は、対前年同月増減と同様に、前年同月を基準とした比較であることから、当月の変動だけでなく、前年同月の変動の影響も受ける点には注意が必要です。

図 就業者の季節性(2020年の季節指数)

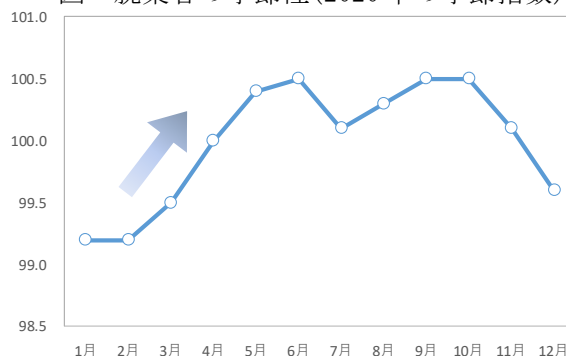


表 就業者数の増減

(万人)

	季節調整値		原数値			
	実数	対前月増減	実数	対前月増減	対前年同月増減	対前年同月増減の拡縮
2019年4月	6707	▲16	6708	21	37	▲30
2020年3月	6732	▲11	6700	9	③ 13	▲22
2020年4月	6625	① ▲107	6628	② ▲72	④ ▲80	⑤ ▲93

(⑤=④-③)